ユースサミットのスピーチ原稿　[下書き]　　ジャニス・コール

イントロダクション：

皆さん。こんにちは。私の名前はジャニス・コールです。このサミットで、のちほどスピーチをするティム・ベルとふたりで、IFCAユースプロジェクトのディレクターをつとめています。

美穂さんから、IFCAについて、またこの団体の国際的な要素についての私の考えを話すように、頼まれました。これは、私たちの活動の上でも、非常に重要かつ、画期的なテーマです。

社会的養護やユース・エンパワーメントなどについての問題提起：

昨年、IFCA の一員として日本に行ったことは、私の人生経験の中でも最もやりがいの有ることだったと同時に、私が今まで成し遂げた事のなかでも一番難しいことのひとつでした。私のまわりの人たちは、私の潔癖性の一面を知っています。どんな場合でも、計画性と目的を持って行動するのが私です。大きな会場でたくさんの人たちに向かって話しをするということは、考えただけでも疲労困憊、震えがくるようなことでした。昨年の秋、日本に初めて行った時の経験は、そんな私の「心地よさの限界」を完全に打ち砕く行為の連続でした。いくつもの都市に、私と性格がとても違う人たちと一緒に移動し、ふだん気心の知れた友だちにも話さないような個人的なことを、あからさまに見も知らぬ人たちに打ち明けるという体験をしました。私は、日本語はほとんど一言も話せません。この言語の不自由さが、「自分でコントロールのきかないことは、人任せにすればよいのだ」という自分へ言い聞かせてきたことを、自然に実現してくれて、安心感と心地よさを運んで来てくれたことは確かです。自分の考えや意見を、人の助け無しには表現できない。それだけでなく、通訳をする人が、私の言いたいことを十分に、かつ性格に伝えられているかがわからないまま、信用しなければならない。これは、フォスターケアに身を投じる、ということとの、日本だけでなく、アメリカでも通用する、完璧なメタファー（隠喩）です。これは私が発明した定義ではありませんが、『フォスターユース（社会的養護の当事者）の最大の困難は、自分たちの生活や生き方を自分でコントロールできない状態』です。知らない国に行って、言葉で不自由な思いをする私の経験は、この、面識も無い人に自分の運命を任せるフォスターユースの状態に酷似しています。私の場合は、この“通訳”の役目をした人が、今まで出会ったたくさんの人たちの中でも、「こんな人に会いたかった」と思わせるような人だったから、ラッキーでした。でも、言葉の不自由さ、ということに限らず、生活すべて、将来のすべてを誰かの手に委ねなければならないとしたら・・・・・。

今までの私の話しは、ユースの視点を明確にするための内容でした。同時にまた、 ここにいる１０人のユースの仲間たちが、ユースの声とエンパワーメントへの熱い思いを象徴するための「投げかけ」でもあります。

私たちの直面する現実はグローバルです：

日本に行く前、実は私は、人に自分の気持ちや言いたい事が伝わらないのではないか、誰かをだましているように取られるのでは、などと考えあぐねました。私のフォスターケアの体験は、他の国や文化とは関係のないものなのでは、という思いが頭をよぎりました。でも、事実は、私の恐れていたことと、まったく違っていました。IFCAの活動を通して、私は日本のユースたちと交流しました。そこから、当事者の置かれている状況は違っても、私たちの経験、そしてその経験が私たちユースに与える影響はまったく同じだということがわかりました。

私たちが東京に滞在した時、地域のユースたちを集めて、ワークショップをする、という機会に恵まれました。最初は、そのユースたちはとてもシャイで、自分たちの名前も言いたくない子たちがいました。ですが、２時間のワークショップの後、自分のフォスターケアの経験を語るだけでなく、洞察力に満ちた政策提言につながる意見を述べていたのです。彼らの発言は、皆さんが非常に良く耳にすることだと思います。

* ソーシャルワーカーはいったい自分たちのことを知っているのだろうか。
* ほかのユースたちと会う機会、交流する場を持ちたい。
* ソーシャルワーカーが私たちにもっと定期的に合い、ニーズに答える体勢をとって欲しい。
* もしかして、僕たちは里親の重荷なのではないか・・・。特に経済的な面で。
* 里姉妹と突然別れなければならない状況をつくったのは児童相談所だった。私にとって、妹たちは自分の家族と同様だったのに・・・。

日本では、里親やソーシャルワーカーと話す機会がありました。彼らが抱えている心配事や私たちに尋ねた質問は、非常に耳慣れした内容でした。「子どもたちをしっかり支援してあげたいけれども、それができていないようで心配だ。子どもたちの将来についても気がかりである。自分たち養育者への支援、そして、子どもやユースたちへの支援がもっとあったらよいのに、と考える。システムを改善するために、十分手をつくしているのだろうか・・・・。」などなど。私たちの間に大海が横たわっているにもかかわらず、かかえている悩みや問題はとてもつながっていることが、会話をするすべての人たちを、癒やしてくれました。

日本での出会いやワークショップから、私はフォスターケア制度についてたくさん教えられました。自分が育ったフォスターケア・システムの成功と失敗について、あらためて様々なアイデアが湧いて来たのです。自分の身をそぐような思いをこめて、子どもたちを育てている里親たち。ユースの将来を真剣なまなざしで見ている専門家たち・・。私が日本で会った人たちは、今日、ここに集まってくださった皆さんと、同じ思いを抱えていました。

私が見たその国では、ユースの声や視点が必要なことを痛感しました。そして、何も言えずに、羞恥心に満ちているユースたちに会いました。そう・・・私がそうだったように。今の私のスピーチは、ポジティブなことが何もないように聞こえているかもしれません。ですが、私には、そのすべての経験が希望を与えてくれています。私たちが、これから“変えて行く”可能性への希望です。

（ここにIFCA のユースプロジェクトの活動内容を加える。）

結び：

IFCAのユースプロジェクトが、日本だけでなく、この国でも関心を集め、あらゆる人たちが、このフォスターケアという重要な問題について話し合いを始める原動力になっていることを、たいへん嬉しく感じています。私たちはこれからも、フォスターケアへの興味や意識を高め、ユースが自分の声を持つように勇気づけるだけでなく、これは世界的なレベルで協議、支援されるべきグローバルな課題だということを明確に打ち出して行きたいと思います。